

「外地」と相撲 —「国技」をめぐる一視点—

Sumo in “Gaichi”

(Colonies and Japanese-occupied Lands)— from a Viewpoint of “National Sport”

胎中 千鶴
Chiduru TAINAKA

Abstract

The *Sumo* wrestling in the modern time came to be understood in the Japanese society as a “national sport” through a *sumo* boom which had been ignited by a sudden rise of nationalism since the Sino-Japanese and Russo-Japanese Wars straddling 19/20th centuries. Then in the war period of 1930-40s, nationalistic ideological discourses were attached to it, and since it was introduced into *Kokumin Gakko* (war-time primary school) as a formal sport item, *sumo* emanated unique presence as a national sport at any place in and out of the country. In such circumstances, some Japanese advocates presented themselves who tried to make a clear distinction with *Oo-zumo* circle at home and to spread *sumo* among youth in “the new lands” of Taiwan and Manchuria in the ideal form. They advocated that one could cultivate “Japanese spirit” and train “New Japanese” through *sumo* which should be another sort of national sport with fundamental and radical nature. This monograph examines rudimentarily some phenomena and discourses over “*sumo* as a national sport” in modern time from a relative viewpoint with “*gaichi*” such as colonies and Japanese-occupied lands. This point has been almost neglected in the *sumo* historians.

Key Words : *Sumo*, Taiwan, Manchuria

キーワード：相撲、台湾、満洲

はじめに

近代における日本の相撲は、明治政府の進める近代化政策のもとで、前近代的な「野蛮なる技」⁽¹⁾として批難排撃の対象となった。危機的状況に陥った相撲興行（大相撲）が息を吹き返したのは、1894年（明治27）の日清戦争、1904年（明治37）の日露戦争のナショナリズム高揚期である。にわかに巻き起こった相撲ブームに乗じて、相撲興行組織の東京相撲協会は1909年（明治42）、東京両国に常設の屋内相撲興行場を設立して「国技館」と命名、これが発端となって、1910年代には日本社会で「国技」と認識され始め、さらに1925年（大正14）、財団法人大日本相撲協会が成立したことにより、「本邦固有ノ国技」（財団法人認可申請書）として一定の社会的認知を得た。また、1930～40年代の戦時期においては、国家主義的なイデオロギー言説を付与され、国民学校の体育教材として正規に導入されるなど、内地・外地を問わず独自の存在感を持つようになった。現在の日本においても、財団法人日本相撲協会が主催する大相撲興行を国技ととらえる意識は、社会に確実に根づいている。

近代スポーツが普遍的かつ体系的なルール設定によって、人種や国籍と超えた国際化を果たしたものであるのに対して、日本固有の伝統文化に基づくとされる国技としての相撲は、今福龍太が言うように「近代世界によって均質化される前の伝統的な身体性を引きずったスポーツ」であり、「どこかで身体儀礼的な宗教的なコスモロジー」を抱え込んでいる技芸のひとつ、⁽²⁾といえる。帝国主義化の道を歩んだ近代の日本社会が相撲を国技と認識したのであれば、相撲というナショナルな身体表現には、「帝国日本」が帝国の内外に向けて何を見せようとしたのか、端的に示されていると考えてよいだろう。

一方で相撲は、戦時下においても広く民衆に親しまれた大衆的なスポーツであり、とりわけ大相撲観戦は庶民の娯楽のひとつとして重要な位置を占めていた。国内はもとより、植民地などの「外地」でしばしば実施された大相撲巡業も、特別なイベントとして耳目を集めた。

しかしこうした大相撲の「見る」娯楽としての側面は、相撲を純正な国技として成立させようとする人びとにとってみれば、いわば不純な要素であり、障害となるものだった。そのため、内地の大相撲界とは一線を画し、台湾や満洲などの「新天地」において理想的な相撲を現地青少年に広めようとする日本人指導者も現れた。

近現代相撲史に関する主な先行研究としては、新田一郎と赤澤史朗の優れた著作や論考がある。⁽³⁾ 本稿はこれらの成果に大きく依存しつつも、近代における「国技としての相撲」をめぐる現象と言説について、これまで相撲史において言及されることが少なかった植民地・占領地など、いわゆる「外地」との関係性という視点から実験的な考察を試みる。

1 初期の大相撲海外巡業（1910～1920年代）

上述のように、明治初期の日本社会には、裸体をさらす相撲は欧化主義に逆行する「蛮風」と排撃される傾向があり、大相撲興行も著しく衰微した。しかし1894年の日清戦争で新領土台湾を獲得し、1904年の日露戦争後は中国大陆への足がかりをも得た日本社会では、ナショナル

ズムが一気に高まり、それに後押しされるように大相撲も存在感を取り戻し、人気力士も登場して活況を呈した。

明治末期の相撲興行団体は、東京・大阪・京都の3カ所にあったが、東京にくらべて京阪両団体は興行収益もふるわず、しばしば東京相撲との合併興行で糊口をしのいでいた。

大相撲の海外巡業に関する史料上の記録は、日清・日露戦争期以降散見されるようになる。筆者の手元の史料のうち、最も初期のものとして、1896年（明治29）、前年の下関条約によって日本に割譲された直後の台湾に「国技館部屋大相撲団」が訪れ、「他に多くの慰安興業物の催されない当時として、島都の人気を背って居た」⁽⁴⁾という記録がある。しかし大相撲興行施設としての「国技館」が落成したのは1909年（明治42）であるから、「国技館部屋大相撲」が正式な呼称とは考えにくく、東京相撲の一团かどうかとも現時点では特定できない。

1901年（明治34）前後には人気力士の大碓をはじめとする京都相撲の一行が台湾を訪れている。このとき大碓は、台北日本人社会の消防団で勢力を張っていた船越倉吉に依頼され、敵対する「壮士無頼の徒」からある料理屋を守るために用心棒役を務めた。丸太を持って店の周囲を固めた姿は「さながら今日の剣劇活動写真を見る図」だったという。⁽⁵⁾

船越倉吉はもともと土木建築業者で、日本の台湾領有直後に來台し、京都出身の建築業者澤井市造の配下として島内の鉄道敷設、築港、道路建設工事などに携わった。1900年（明治33）、台北県当局は「内地人消防組規則」を發布し、それまで澤井ら民間人に任せていた消防業務を統括して台北消防組を設立、1902年（明治35）に「義侠の徒」として知られていた澤井に頭取就任を要請した。組の幹部には土木・運送業者が多く含まれており、船越も副頭取に就任した。⁽⁶⁾ 1930年（昭和5）の船越の葬儀に出羽の海部屋から花輪が送られていることや⁽⁷⁾、1936年（昭和11）の台湾巡業の勧進元（興行主催者）が澤井のもとで消防組副組頭を務めた篠塚初太郎であることから⁽⁸⁾、こうした台北日本人社会の「顔役」ともいえる土木建築業者が、植民地期全体を通じて大相撲台湾巡業の有力な受け入れ先であったと考えられる。

一方中国大陆への初期の巡業としては、1903年（明治36）ごろ、当時大阪相撲にいた力士雲龍辰五郎が、力士仲間30余名とともに「支那興行」をおこなったという記録がある。香港での興行は「素晴らしい人気」だったが、レスリング選手に試合を申し込まれて惨敗し、一気に人氣が低落、帰国の旅費さえも捻出できず、「石油船にヤット乗せて貰い、南京米の粥を啜って、漸く内地に辿り着いた」という。雲龍はその後さらに韓国、満洲、台湾でも興行を試みており、これが本格的な大相撲外地巡業の嚆矢とみてよいだろう。⁽⁹⁾

1905年（明治38）の大阪相撲の中国巡業に続き、1910年（明治43）には東京相撲の韓国・満洲巡業がおこなわれた。これは韓国併合直前の6月、韓国統監の曾禰荒助が東京相撲の年寄花籠に「東京力士を韓国に巡業せしめ、同国に尚武の氣風を示しては如何」と勧めたことで実現したという。⁽¹⁰⁾ 常陸山、梅ヶ谷両横綱を筆頭に総勢186名の大規模なもので、主要力士は品位を保つべく、道中を羽織袴で通したという。韓国皇帝の上覧相撲に臨んだのち中国の大連を経て、旅順では日露戦争戦没者の追悼相撲をおこなって帰国した。⁽¹¹⁾

このほか1915年（大正4）の中国巡業、1917～18年（大正6～7）の台湾巡業など、1910～1920年代にかけて、日本のアジアへの勢力伸長と歩調を合わせるように海外巡業は活発化した。

さて当時の海外巡業の実態とはどのようなものだったのか、史料上からみてみよう。1905年（明治38）7月、日露戦争直後の上海に大阪相撲が巡業を打った。幕内力士を始めとする40人ほどの一行で、サーカス団や「女芝居」との合同興行だった。神戸から船に乗り、門司経由で2昼夜かけて上海に到着した一行の興行とは次のようなものだった。

上海の張家公園に公会堂があり、そこで寝泊まり、自炊して、一か月ほど生活した。掛け小屋をつくって、当時としては珍しい電気をつけ、夜興行だった。お客はほとんどが日本人で、入りはあまりかんばしくなかった。一か月間の興行も終わりに近づいたころプロレスのサンテル一行と合併して興行しようじゃないかという話が持ち上がり、レスリング形式で一日、相撲方式で一日やることに決まった。（中略）レスリング形式でレスラー、相撲方式で力士が勝つのは当たり前で、つまらない試合だったが、この二日間、お客はいっぱいはいり、そのあとの一週間は、立派な旅館松崎洋行というのに泊まることができ、ごきげんだった。⁽¹²⁾

このように当時の相撲巡業は、内地・外地を問わず一種の「見せ物」的な興行だったようだ。力士同士の勝ち抜き戦などのほか、地元の格闘家と力比べをしたり、時には野球など相撲以外のスポーツに参加して観客を沸かしたりすることもあった。⁽¹³⁾ また巡業は、力士たちにとって「苦しい本場所の十日間に対する一種滋養剤のようなもの」であり、「放縦なる地方巡業に依って厭な本場所中の心労を忘れることが出来る」時間だった。⁽¹⁴⁾ 1917年（大正6）の台湾の雑誌には、來台した大阪相撲について「八百長や風紀の悪いので失敗を重ね不人気」⁽¹⁵⁾ だったと酷評する読者投稿も掲載されており、力士たちが巡業先で大いに羽を伸ばしている状況が見て取れる。

また巡業は天候に大きく左右されるため、「巧くアタレばボロイ儲けが出来るが、一つはずれたら最後、其惨さは到底御話しにならない」⁽¹⁶⁾ というリスクがあったが、相撲団にとっては重要な収入源だった。とりわけ巡業自体がまだ珍しい外地での興行は集客を見込めるとあって、関係者には魅力的だったようだ。たとえば1910年（明治43）頃、大阪相撲の台湾巡業に参加した呼出しの前原太郎は次のように述べている。

皮肉なもので大阪に来てみると、その年の大阪の本場所ができないという不景気だ。協会でもいろいろ協議の結果、大場所を台北へ持って行こうということになった。（中略）その台北の本場所は見物も来たし、相撲取りも小遣いははいるし、大喜びだった。五人抜きとか、ショッキリとか、番外がたくさんあるものだから、相撲さんは小遣いには困らないし、それから内地へ帰ってからも、また台湾に行こうじゃないか、などとたびたび話が出たくらいで

あった。⁽¹⁷⁾

1918年（大正7）3月、東京・大阪両相撲団の合併台湾巡業が7日間にわたっておこなわれた。これは台北随一の割烹旅館「梅屋敷」が創業20周年を記念して勧進元となったもので、東京・大阪相撲ともに横綱大関を筆頭に計200余名の力士が参加した。有力な勧進元による興行とあって、台北花柳界が総出で一行を出迎えるなど、華やかなイベントであったことがうかがわれる。

流石は全島第一の大籠（まがき）が勧進元とあって、三発の煙火が轟くと各料亭を始め台北検番百数十の紅裙隊が満艦飾を施して停車場に雲集する。殺風景なプラットホームも俄かに春爛漫の花舞台と化し、濃艶百花の研を競う華やかさに駅員までが恍惚として夢心地になる。⁽¹⁸⁾

大阪相撲は1920年（大正9）、「当時の不況に何とかして盛り返したい熱意」⁽¹⁹⁾から、アメリカ巡業も実施している。アメリカ巡業は、1907年（明治40）に東京相撲の常陸山一行が渡米したのを皮切りに、1914年（大正3）のハワイ巡業、翌15年のサンフランシスコ万博興行といずれも成功裏に終わっており、1920年の興行でもサンフランシスコやロサンゼルスでは1ドルから5ドル程度の入場料で1か月に及ぶ興行を打ち、各地で平均3500人程度の入場者があった。主に現地在住の日本人客が中心で、入場者のうち「白人は一割位」だった。参加力士によれば「金は儲かるし、病人は一人も無いし、コンナに巧くいっただ事はありません」というほどの大成功で、20数万円の利益を上げたという。⁽²⁰⁾ これら大正期の一連のアメリカ巡業について、「国技の玄妙と日本人の体格の偉大さを現実を示した」ことが「嬉しい功績」として評価されたという1940年代の史料もあるが⁽²¹⁾、同時代の雑誌記事などを見る限り、単に増収を見込んだ活動の一環としてとらえるほうが自然であろう。

以上、大相撲の初期の海外巡業を概観した。日清・日露戦争を経た日本は、植民地を含む東アジアやアメリカ各地に日本人コミュニティを形成しつつあり、相撲興行はそうした外地の日本人を対象におこなわれる最も大衆的な娯楽であった。慣れない外地の生活のなかで、相撲観戦は日本人の大きな楽しみの1つであっただろうし、集客が見込める海外巡業は、財源の確保に苦慮する大相撲団の重要な収入源だった。当時の海外巡業は、明治・大正期の知識人が「粗暴な俗臭に充満した」「裸体ショウ」⁽²²⁾として切り捨てようとした興行相撲の土臭さによって、むしろ活気づいていたのである。

2 八尾秀雄の台湾経験

しかし1920年代になると、大相撲に対し一連の改革を求める声が高まった。スポーツ専門誌『野球界』の1921年（大正10）7号には、主幹横井鶴城が「角道改革諸案」と題する改革案を

掲載し、「角力は、依然たる旧衣をいつ迄も着ていないで、旧衣を脱し新しい衣を着かえればよいのである」として、力士の品位向上、力士の待遇改善、健康や衛生の管理、八百長廃絶、地方巡業の改良、審判規則の成文化などを主張している。⁽²³⁾ ほかにも、相撲関係のジャーナリストや著名人から相撲部屋制度の廃止、弟子養成システムの合理化などの意見も出された。⁽²⁴⁾

こうした動きの背景には、当時勃興期にあった学生相撲の隆盛や、1920年（大正9）のアントワープ・オリンピックなど、国際的なスポーツ大会を契機とする近代スポーツの日本社会への浸透がある。相撲が名実ともに国技たるためには、国民体育の向上に寄与する「近代的な競技」を志向するべきとする世間からの要請が強まったのである。

しかし1923年（大正12）の関東大震災で国技館はほぼ全焼、相撲興行の核となっていた東京大相撲は壊滅的な打撃を受けた。翌年国技館は再建されたものの、その後の不況も手伝って興行収益は低迷し、改革どころか相撲興行の維持すら危ぶまれる状態となった。

危機感を抱いた関係者は1925年（大正14）、東京・大阪相撲を合併させるとともに、財団法人化を文部省に申請、同年「大日本相撲協会」設立が許可された。設立の経緯をみると、頭山満、杉山茂丸ら国家主義者が宮中とのパイプ役として動いたことや、相撲好きで知られる皇太子（のちの昭和天皇）から下賜された奨励金から「摂政宮杯」を作製するなど、皇室との接近が色濃く反映されているのがわかる。1927年（昭和2）、賀陽宮から「国技相撲を普及奨励せよ」との「御沙汰」を受けた当時の陸軍大将福田雅太郎は、翌年大日本相撲協会の初代会長に就任した。⁽²⁵⁾

このように大相撲の財団法人化は、当時存亡の危機にあった相撲興行の生き残りをかけた転換であった。単なる興行団体から、国技の普及・教化団体という「国家的保護」⁽²⁶⁾を期待できる地位への上昇を果たしたのである。陸軍大将の会長就任や天皇賜杯など、国技の表象にふさわしい装置まで手に入れてしまった大相撲は、国民の要請する「国技」の内実を伴わないまま、このあと戦時期にかけて「国技相撲」というアイデンティティに活路を見出さざるを得なくなった。

以上のような20年代の大相撲をめぐる環境の変化を経て、日本社会に「相撲＝国技」という意識が定着したのは、再び戦時期を迎える1930年代のことである。30年代のナショナリズムの高揚は、国技相撲を体育の一環として小学校教育に取り入れようとする気運を生んだ。1936年（昭和11）、学校体操教授要目の改正によって相撲は尋常小学校5・6年生男子の競技種目として導入された。

こうしたなかで、1930～40年代に民間の相撲指導者として活動したのが八尾秀雄である。八尾秀雄は1906年（明治39）生まれ。出生地は不明だが、1910年代に父・力松が台湾各地の小学校で相撲を指導するようになり、八尾自身も1918年（大正7）12歳の時から父の指導に同行したというから、台湾生まれの可能性が高い。父の死後は弟とともに遺志を継いで巡回指導を続け、1927年（昭和2）から5年間にわたって台湾東部の花蓮港庁・台東庁で高砂族（台湾先住民）の児童のべ1万4000人を対象に教授した。⁽²⁷⁾ その間、父の考案した相撲体操を改良・完

成させ、大阪・東京のほか全国の小学校で学童相撲の指導にあたり、のちに満洲に渡った。

正規の教員資格をもたない八尾力松や秀雄がどのような立場で台湾の教育現場に関与したのか、秀雄がなぜ先住民に指導する機会を得たのか、詳細は明らかではない。台湾島の東部にあたる花蓮・台東地域には、オーストロネシア語族系の先住民（タイヤル、ブヌン、パイワン、アミ、プユマ族など）の集落があったが、統治期初期から始まった官営移民事業によって内地から農業移民が入植したほか、台湾各地から樟脳・砂糖事業に従事する漢族系労働者も多数移入していた。1923年（大正12）時点で花蓮港庁・台東庁の人口は、先住民がおおよそ5万5千人、漢民族が2万6千人、日本人が1万5千人ほどで、三者のあいだには、それぞれ山麓や平地の集落、港湾周辺など、明確な「住み分け」がみられたという。⁽²⁸⁾

先住民の初等教育機関としては内地の小学校に相当する「公学校」（1922年までは「蕃人公学校」）のほか、山地には日本人警察官が教師を兼務する「蕃童教育所」が設置されていた。これらの教育機関に相撲が導入された経緯や時期は不明だが、プユマ族の子弟が通学した卑南公学校（現・台東市南王）の記録によれば、1930年（昭和5）の2月から児童が相撲の練習を開始、木村という相撲教師の指導を受け、4月には台東相撲大会にA・B2組で参加している。⁽²⁹⁾ また別のプユマ族の集落では、1931～2年頃から土俵ができて相撲がおこなわれるようになったという。⁽³⁰⁾ 1930年代初頭は内地においても相撲がブームの兆しをみせていた時期であり、台湾東部でも同様に八尾のような相撲指導者を必要としたのであろう。

異民族を対象とする初等教育現場に相撲指導者として臨んだ八尾が、限られた時間に多数の児童に指導するためには、「従来の如き個人教授、以心伝心の教授法」⁽³¹⁾ ではやはり限界があった。先住民族のなかには相撲と同様、組み合って相手を倒す伝統競技を継承する部族もあるが、たとえば日本統治期に「角力」と称されたプユマ族の「マピービー」は、土俵を作らず、相手の頭髮をつかんで引き倒す競技で、部族の祝祭的行事「猿祭り」の一環としておこなわれるものだった。⁽³²⁾ また漢族系住民の中国文化には相撲に類似する遊戯や競技が少なく、裸体に褌を締めることに強い抵抗感を示すのが一般的であった。八尾の眼前にいるのは、幼少時から日常的に相撲に親しむ「内地人」とは異なる身体をもつ、植民地の児童たちだったのである。

おそらく彼の相撲体操は、そのような子どもたちを「学級若しくは団体指導の出来る方法」、つまり「学校体操の如く一斉に取り扱いの出来る方法」⁽³³⁾ でコントロールする必要性に迫られて生まれたのであろう。もともと初期の相撲体操は「普通の学校体操を単に相撲の準備運動、整理運動として裸体で行う」ものだったが、その後「学校体操を結合」し、さらに相撲の基本動作を体系化したのち、音楽をつけて連続的に行わせるよう工夫を重ねたという。⁽³⁴⁾ 1935年（昭和10）、八尾は振付けつきの相撲唱歌「讃えよ国技」（作詞・八尾秀雄・作曲・岡本新市）をレコード化した。⁽³⁵⁾ とすれば退屈になりがちな基本運動の一部にメロディをのせ、遊戯として楽しませることで「相撲体操の興味化」を意図したのであった。⁽³⁶⁾

さて、八尾がめざした学童相撲とは結局どのようなものなのだろうか。彼は次のように述べている。

真の相撲道を生かす意味に於いて、従来の習慣にこだわらぬよう、時代錯誤に陥らぬよう、形式倒れにならぬようよう、新体育の思潮に歩調を合わせて、児童の身心に適應するよう形式方法を改良して行かなければならないと思う。⁽³⁷⁾

八尾の指導法は、児童の興味・関心を重視し、身体的諸能力の「調和的発達」を目標としている。相撲体操、四股などの基本運動、屈伸運動のような補助運動を組み合わせることで「従来の相撲の欠点を補」い、⁽³⁸⁾ 相撲を教育学的見地から再構成しなおしたものといえよう。それは明治以降教育現場に導入された欧米の体育理論や、1928年（昭和3）から普及する国民保健体操（ラジオ体操）の理念とも価値観を共有する。教育現場の相撲が近代スポーツと共通項を持てば、大相撲と質を異にするのはある意味当然である。彼の大相撲との距離感は、以下の一文にもよく表れている。

相撲と云えば直ちに大相撲を連想し、村相撲のやり方をそのまま真似たりする者があったが、それではいけないと思う。職業としての相撲又は祭か何かの余興として行ふ相撲と、教育的に体育的に児童の心身を陶冶する目的で行われる相撲とは、自らそこに何か違ったところがなければならぬ筈である。⁽³⁹⁾

同時に、彼のめざす学童相撲のもう1つの目的とは「相撲固有の攻防の術を習練することによりて身体を強健敏捷にし、精神を快活剛毅ならしめ、特に日本精神の錬磨をはかり、以て心身共に健全なる第二の国民を育成する」⁽⁴⁰⁾ ことであつた。ここで彼がいう「日本精神」とは、尚武性と敬徳心、剛毅・快活・公正・忍耐・持久・質素などの品性である。相撲はこれら「日本精神」の育成と陶冶に資するものでなくてはならず、そのためには、勝敗のみならず、土俵上の礼儀作法や対戦相手への思いやりなど、「武士道」に通じる精神を学ばせる必要があると八尾は考えていた。

1934年（昭和9）から翌年にかけて、八尾は東京市内の小学校で巡回指導にあたり著書2冊を出版、1936年（昭和11）に台湾に返ると台中州員林郡の田中公学校に体育主任として赴任し、漢族系台湾人児童の体位向上を目的とする本格的な相撲指導をおこなつた。4年生以上の3クラスで段階的な指導を進めた結果、体重や胸囲の増加など顕著な体位向上がみられたほか、「始めは裸になることを非常に嫌つた」子どもが、「今では寧ろ裸になることを喜ぶようになった」、「見るからに澁刺として内地人の子供らしくなつて来た」⁽⁴¹⁾、「台湾本島人の特性ともいふべき利己主義、怠惰、臆病等を或る程度まで矯正し、勇敢なる行動をとるようになり、日本人として姿勢態度が出来てきた」⁽⁴²⁾ などの影響がみられたという。⁽⁴³⁾

八尾は自身の相撲体操や教育相撲について、「台湾の小公学児童の協力によって出来上がったものとも云える」⁽⁴⁴⁾ と述べている。近代적かつ体系的な指導方法を用いつつ、競技修得の過程で「日本精神」なるものを一から扶植するにはどうするべきか。植民地の異民族児童に対す

る八尾の相撲指導は、「新日本人」としてふさわしい「日本的身体」を彼らに刷り込む実験的な作業だった。伝統行事と切り離され、土俵の中だけで戦うプユマ族の子どもたちや、「澁刺として」裸体や褌を受け入れるようになった漢族系児童をみたとき、八尾は相撲によって「第二の国民」を育成する手応えを強く実感できたであろう。⁽⁴⁵⁾

こうした「植民地経験」がその後の八尾の相撲指導に大きな自信となったことは間違いない。1937年（昭和12）から八尾は落成直後の大阪国技館講習所所長に就任、さらに近畿地方を中心に各地の小学校で指導し、38年には映画「教育相撲」を制作、著書も3冊続けざまに出版するなど、⁽⁴⁶⁾ 名実ともに相撲指導者としての地歩を固めつつあった。⁽⁴⁷⁾

しかしこの八尾の一連の活動に対し、厳しい批判を浴びせたのが大日本相撲協会である。1933年（昭和8）、学童相撲ブームを受けて協会は佐渡ヶ嶽高一郎の発案した「相撲基本体操」を公認の相撲体操とし、積極的な普及活動を開始した。佐渡ヶ嶽は1897年（明治30）生まれ、阿久津川というしこ名で最高位は前頭筆頭、1929年（昭和4）に引退して年寄佐渡ヶ嶽を襲名した。1923年（大正12）ごろから青年相撲の指導を開始し、1930年（昭和5）に相撲基本体操を完成させ、各地で指導にあたったという。

佐渡ヶ嶽の相撲体操の原点は、力士としての貧弱な体型を、四股や鉄砲という基本練習の反復によって克服したという自身の経験にある。彼の指導する学童相撲もまた、勝負に重きを置かず、型に熟達させ、「正しく闘って綺麗な相撲をとろうという考え」が自然とわき上がるようになることを理想としていた。⁽⁴⁸⁾

佐渡ヶ嶽は「相撲の一番いいところ」として、立合いの際に「無我の心境に入って、気力体力をお互いにそこに合一しようとするところ」を挙げ、これこそが「一ばんの修養であり、鍛錬である」⁽⁴⁹⁾ と述べている。これは八尾が、大相撲の立合いでしばしば見られる「待った」を「スポーツマンシップに悖るもの」⁽⁵⁰⁾ とし、競技者の立合いは審判員の合図で行うべきと強く主張していることへの反論である。気力体力を合致させようとしているところに生ずる「待った」には正当な理由がある、というのが佐渡ヶ嶽の考え方であった。

佐渡ヶ嶽の指導法を後援する大日本相撲協会も、協会の機関雑誌『相撲』誌上で、名指しこそしないものの、八尾への痛烈な批判を繰り返すようになる。たとえば次のような論調である。

これを（佐渡ヶ嶽の相撲体操のこと…引用者注）、より緩和して、より操練しやすく、幼児にも適するようにすべし云々と唱え、自ら、これを按配し、加減して、新工夫なりとし、新考案なりとして自慰すると同時に、これこそ真の「相撲体操」なりと誇負・僭称して、世間に売物にしている徒輩もあるように聞く。（中略）彼等は、根本的に一つの誤謬に陥っている。それは、相撲をより遊戯、もしくは体操にちかづけて、興味的ならしめ、楽しみ興じさせつつ、相撲に馴れしめようとするのであるが、外来新競技の普及・振興を計図するならばともかく、国技相撲にあっては、絶対にその要はない。相撲は徹頭徹尾、相撲的に演練せしむべきであって、ここにのみ国技相撲の本領があるのだ。相撲を体操にちかづけるのではな

い。あらゆる体操を相撲にちかづけしめればよい。⁽⁵¹⁾

また、八尾が指導する関西の学童相撲大会についても「大てい立上るとすぐに組んで禪しを引く、四つ相撲が多く見受けられたが、さらに一層押すことと、突張ることの練習をさせる必要があると思う」「行司のみはカッターシャツにズボン、裸足という姿で行司の役目をつとめている。まことに異様な姿で、これは実に不釣合であると思う」「(行司の態度が) 全然相撲道の行司作法にかなっておらぬ点が多く見受けられる」⁽⁵²⁾ といった批判を掲載、ついには協会取締の藤島秀光みずからが、「相撲道に對立なし」というタイトルで『相撲』に一文を載せて、「相撲道は、日本精神と同様、二道なく、對立は絶対にありませぬ。ありとすれば、それは土角力以外の何でもありませぬ。」⁽⁵³⁾ と切り捨てた。

こうした協会の激しい非難を受けた八尾は国内の活動の道を断たれ、後述するように1940年(昭和15)、和久田三郎を頼って満洲に渡った。

公益法人でありながらこれまで青少年教育分野への貢献度が低かった当時の協会にとって、私財を投じて道場を開設するほどの情熱をもって学童相撲の指導にあたる佐渡ヶ嶽は、願ってもない貴重な人材だった。佐渡ヶ嶽と競合するライバルの八尾を協会が排撃したのはある程度当然のことだといえよう。

しかし、よりうがった見方をすれば、そもそも協会にとって八尾の相撲は大相撲とはまったく出自の異なるもの、「異物」だったのではないだろうか。佐渡ヶ嶽の相撲体操に象徴されるように、大相撲の力士の身体には伝統的身振りが継承されている。相撲興行独特の部屋制度や集団生活のもとで、力士は力士らしい体型や挙措を獲得する。四股や鉄砲、すり足の反復が彼らの基礎訓練の主軸であり、対戦相手と阿吽の呼吸をはかりながら勝機をさぐる「立合い」を、とりわけ重視する。日々の鍛錬の過程で力士が培っていく相撲の道とは、日本列島のプリミティブな文化伝統につながる土着的な精神性を、相撲の身体を通じて再生させる所為であるともいえる。当時の日本社会では、相撲は民衆にとって日常的に観たりおこなったりする親しい娯楽だったはずだから、力士ならずとも大相撲のもつこうした「伝統的身体」は、ある程度人々に共振・共有されていたと考えられる。

しかし台湾に育った八尾は、はじめからそのような伝統的身体から引き離された場所にいた。帝国の植民地となって間もない台湾の日本人コミュニティには、おそらく内地の村祭りの奉納相撲や相撲大会のような、子どもたちが伝統的な祝祭性を帯びた相撲に出会える場は少なかっただろうし、相撲興行を見る機会もまれだっただろう。八尾にとって相撲は、自身の身体にあらかじめ浸透した身振りではなく、ある程度他者化された競技だったのであり、だからこそ近代合理主義と日本の精神性を接合したかのような、協会からみれば「異様」で「不釣り合い」な相撲を異民族の児童に注入することを恐れなかったのではないだろうか。植民地は、現地の伝統的価値観の脱色と新たな着色への欲望を支配民族に許してしまう空間なのだから、台湾における八尾の相撲指導はことさら特別な行為とはいえない。しかし彼がひとたび「内地」

でそれを試みようとしたとき、この「外」からやってきた異様な相撲を協会が許容することなど、でき得るはずもなかったのである。

3. 戦時期の外地巡業（1930～40年代）

1930年代戦時期の相撲ブームは、1937年（昭和12）の日中戦争勃発以降、69連勝の大記録を達成した横綱双葉山の人気とともに沸騰し、同年の5月場所からは観客急増に対応して本場所の期日が延長されるなど最盛期を迎えた。1942年（昭和17）には文部省の「国民学校体練科教授要項ニ関スル件」により、国民学校初等科5・6年に加え高等科1・2年男子の「体操及遊技競技」に導入されたため、国技としての相撲の存在感はいや増すばかりであった。

しかし教育現場に本格的に相撲が導入されたことで、大相撲にも国技にふさわしい品格とナショナリスティックな精神性を求める世論も強まった。相撲を武道ととらえ、戦時国策に沿う相撲精神の普及徹底を主張した衆議院議員の藤生安太郎は、「ヤヤモスレバ熱狂の人気ニ馴レテ興味本位ノ見世物ニ墮シ、力士ニ「士」タルノ風格ナキニ至ラントス」⁽⁵⁴⁾として大相撲を批判した。「相撲道とは、清く、明く、直く、正しく、強き一謂ゆる日本精神の相撲的に体系化されたもの」⁽⁵⁵⁾であり、これを具えてこそ国技相撲であるとする言説は、この時期から一般に流布するようになる。そのため戦時下の興行統制などともあいまって、協会は「国家的有用性を示し、生き延びる活路を見出す必要」⁽⁵⁶⁾に迫られる状況となった。そうした背景を受けてこの時期に活発化したのが朝鮮・満洲巡業と中国への皇軍慰問である。

1章で述べたように、朝鮮や中国への巡業は1910年代から実施されていたが、1931年（昭和6）の満洲事変後から活発化し、1936年前後から43年まではほぼ毎年恒例となった。この間、朝鮮・満洲巡業は毎年実施、台湾巡業は36・39年、中国各地への皇軍慰問もこれらの巡業に付随しておこなわれている。1940年（昭和15）からは満洲巡業が全15日間の準本場所扱いとなり、「満洲場所」と称されるようになった。

1936年（昭和11）の満鮮巡業を例に挙げて内容をみてみよう。6月12日、男女の川、綾昇ら一行は釜山に渡り、その後大邱、浦項、京城、平壤、大連、奉天、新京、チチハル、図們、清津、羅津などを巡回した。全行程570キロ、58日間の長期巡業だった。開催場所は体育場、神社の境内、警察署前広場などで、そこに特設相撲場を設置した。外地巡業の勧進元は、40年代になると警察や軍隊など公的機関が受け入れ先となったが、1936年時点では、各地とも勧進元の多くは在地日本人が個人名で引き受けている。観客の大半は日本人で、各力士の後援会、県人会、地元の小学校や花柳界、駐屯部隊の兵士など団体客も多く、数百人から数千名に及ぶこともあったという。⁽⁵⁷⁾ 内地と同様、外地の日本人社会でも空前の相撲ブームであったことがうかがえる。

しかしこれらの巡業の内容が、勝ち抜き戦やお好み戦、初っ切りなど旧態依然の「花相撲」というべきものだったため、日中戦争直後の北京の街では、次のような日本人の会話が聞こえてきたという。

——一体中国人達は相撲を見てどう思うだろう。

—日本人って俺達より小さい奴ばかりだと思っていたら、随分大きいものもいると驚くよ。

—そうかなあ、僕は変な頭をした怪物が而も裸で取組み合うなんて、却って彼等の事大主義から軽侮の念を抱きやしないかとさえ案ずるね。

(中略)

—然しどうせ大陸でやるなら、而も相撲を以て日本の国技とするならばだ、その国技を中国人に紹介することによって対支宣伝工作の一端を果たすべきではないか。(中略)

—それならそれでもっと方法論を考究すべきだよ。(中略)

—寧ろこの興行性を排撃したいくらいだ。皇軍慰問とは云うがこの地方巡業的興行性を、先ず僕は革むべきだと思ってるよ。

戦時期の外地巡業は、もはや日本人向けの娯楽興行にとどまってはならず、「国技」として異民族のまなざしを意識し、「国技にたずさわる者としての、自負と覚悟とを堅持する」⁽⁵⁸⁾ べきだという意見である。

こうしたなかで「相変わらず相撲を喰物にして渡り歩いている」大相撲に「少なからぬ憤懣を感じ」⁽⁵⁹⁾ ていたのが和久田三郎だった。和久田は1903年（明治36）生まれ。天龍のしこ名で関脇まで務めた元力士である。1932年（昭和7）、力士の待遇改善をはじめとする大相撲界の改革を唱えて一部力士とともに中華料理店「春秋園」に籠城した、いわゆる「春秋園事件」の中心人物として知られる。

その後協会を脱退、関西角力協会を設立して対抗したが、1938年（昭和13）1月、角力協会を解散し、満洲国総務長官星野直樹の紹介で満洲に渡り、総理私設秘書に就任、同年満洲角道会を創設し、さらに同年秋からは首都新京の建国大学の「角力」の授業で指導にあたったほか、ソ連国境の青少年開拓義勇団などへの慰問と相撲指導にも力を注いだ。⁽⁶⁰⁾

「私はどうもこの相撲という文字のうちに、今までの相撲につきまとうすべての因襲と腐敗がこもっているような気がし、それへの反発からして私たちのこれまでの仕事にも『関西角力協会』の名を附した」⁽⁶¹⁾ とのちに述懐する和久田は、内地の「職業相撲」と区別するために、満洲の相撲を「角道」と称した。これは「角力」の角に「道の精神」を加えたもので、勧進相撲以前の相撲節や武技相撲の精神に基づき、科学的・教育的に組織構成した日本武道だという。⁽⁶²⁾ 内地のさまざまなくびきから解放された彼は、新天地で相撲普及団体の組織作りの段階から、自身の理想の実現をめざしたのであろう。和久田は次のように述べている。

新興国の国風振作に相撲技がふさわしいことは、決して『我田引水』的ロジックではない。相撲は満洲国人が非常に好んだ。男子ならば誰にでもできる。他のスポーツのように広大なグラウンドも、高価な器具も必要でない。少しばかりの空地があればことは足りる。私は相

撲ならばたいがいの理屈も知っているつもりだし、現役の力士と取つても減多にヒケをとらぬ自信がある。ことに軍隊と相撲とは縁故もふかい。私は体育連盟の中に、まずこの相撲部門を確立しようと頑張った。⁽⁶³⁾

満洲でも内地と同様、国民学校の正課に相撲が導入されていたほか、現地日本人社会では社会人相撲や学生相撲も盛んだった。星野の相撲好きも幸いし、満洲には和久田が相撲普及のために活動する空間が十分に用意されていたのである。

1940年（昭和15）、彼はかつて対立した相撲協会の関係者に対し、満洲の大相撲巡業を15日間の準本場所扱いにすることを提案、協会側も「これが出来れば経済的にも、たいへんなプラスになると合点」⁽⁶⁴⁾ したという。

和久田の奔走により、1940年（昭和15）7月13日から鞍山2日、撫順1日、奉天5日、ハルビン2日、新京5日の計15日間、協有力士全員が一堂に会し、内地の本場所とはほぼ同内容の満洲場所が実現した。鞍山の記録をみると、一行は12日に大連から到着直後、鞍山神社と忠魂碑に参拝、翌日の初日は午前中から「場内ぎっしりの満員」、2日目も「大天幕も張裂けんばかりの大入」だったという。従来の巡業の花相撲とは異なり、力士が熱戦を繰り広げたせいか、こうした盛況は終盤戦の新京まで続き、特に新京初日には、4千人近い小学生の団体を含む観客が場内を埋めたという。新京2日目の7月28日には関東軍司令官官邸に満洲国皇帝を招待し、御前相撲を挙行、羽黒山、前田山以下32力士のトーナメント相撲をおこなった。⁽⁶⁵⁾

場所終了後、北京・大同・済南・青島・天津などの北支方面と、ハイル・満洲里など北満方面の二派に分かれて皇軍慰問を行い、軍関係者のほか児童・生徒を含む一般市民に対し、通常の巡業並みの取り組みを披露した。いったん帰国後再び9月下旬から「中支皇軍慰問」として南京に向かい、2班のうち1班は漢口、上海方面、2班は蘇州・杭州方面を回って、10月下旬に帰国という予定も組まれた。⁽⁶⁶⁾

このように初回の満洲場所は盛況に終わり、和久田も「協会のお台所に大きな奉公をした」⁽⁶⁷⁾ と述べているところから、協会は高収益を得たとみられる。関東軍司令部・駐満海軍部、満洲国国務院など軍・政府機関から優勝者に大銀杯も与えられ、上述のような御前相撲も挙行するなど、満洲場所の「国技」を飾る演出は内地の本場所と遜色のないものであった。加えて場所に付随しておこなわれた皇軍慰問も含め、協会は国技相撲の宣揚という役割を果たし、存在感を示した。

その後満洲場所は1943年（昭和18）まで続き、戦況の悪化とともに場所後の皇軍慰問にも重点が置かれた。43年12月の雑誌『相撲と野球』の編集後記は「過去の興行第一主義の巡業を脱して、相撲の娯楽面を極度に利用して、皇軍将兵の慰問のために鮮な転向振りを示している」⁽⁶⁸⁾ と協会の活動を評価しているが、力士たちは夏場所が終わるたびに、中国東北部を3ヶ月近くも渡り歩く長い旅を強いられたのである。⁽⁶⁹⁾

さて、満洲場所後の1940年（昭和15）秋、和久田を頼って八尾秀雄が満洲に渡り、学童相撲の指導にあたることとなった。同年の建国10周年日満武道大会では、新京の国民学校に通う満洲人児童の学童試合がおこなわれ、八尾も審判を務めた。11月には新京に総工費140万円の中央道場「神武殿」が竣工し、満洲角道会は満洲帝国武道会（1934年発足）の角道部となり、八尾は角道師範に就任した。⁽⁷⁰⁾

翌年八尾は、和久田と『角道教習指針』（満洲帝国武道会）を著し、さらに1943年（昭和18）に『国民学校体錬科 相撲教材の指導』（精文堂書店）と『国民相撲教育』（国防武道協会）を出版している。八尾によれば「国民相撲」とは、「二十年来提唱してきた教育相撲をさらに強化して相撲の武的本質に重点をおき、新武道としての国民相撲を強調するのであるが、主として国民学校における相撲を意味する」⁽⁷¹⁾もので、和久田の「角道確立運動の一翼」⁽⁷²⁾と位置づけていたようだ。『国民相撲教育』には奉天と新京の国民学校4校における相撲指導の写真や謝意が掲載されており、八尾は満洲でも台湾や内地と同様に、現地の小学校に巡回指導に行っていたと思われる。満洲という新天地を得た八尾が再び理想の相撲教育の実現に自信をみなざらせていることが、次の一文からもうかがえる。

従来の相撲に対する観念を一応精算して、白紙の状態から国技相撲の歴史的意義を顧み、教育的価値を考慮し、而して大きく発展せんとする国民相撲の根本方針を確立しなければならぬ。興行相撲関係者の中には私を相撲道の破壊者の如く異端視する者があるが、決して破壊でもなければ排斥するのでもない。観る相撲から国民の行う相撲への建設である。⁽⁷³⁾

和久田と八尾がめざした角道は、赤澤史朗が述べているように「1930年代に浮上したさまざまの新型相撲」を「独自の相撲＝武道論の立場からまとめ上げたような性格」⁽⁷⁴⁾を持っていた。力士の階級制度の導入、行司制度廃止のほか、立合いも「待ったなし」を厳守させ、黒紋付き黒袴の審判による「構えて」「用意」の声から2秒で「発」の号令に合わせて立つことと定めた。

当時現役力士随一のインテリとして、相撲に関する講演や執筆活動で知られていた笠置山は、号令によって立つ方法について、「相撲を何等予備的に知らない満洲国人に指導するのを目的として発案されたものならば、或いはそれだけの指導を土俵にも必要かしない」としながらも、「日本人ならばそんな号令がなくとも、待ったなしとすれば何の間違いもなく立つことが出来る」と述べている。笠置山の持論によれば、「相撲の持つ要素の唯一の良さ」は「個人を出来る限り伸ばす、即ち、個人を最高に錬成する」点であり、個々人の精神面を錬成する指導こそ、国家と一心同体の国民を作り上げるといふ。満洲の角道にはその点が欠けているとし、和久田らの角道を一面では評価しつつも、「徒らに新を追わんとする点がちらちら感じられるのは何となく時代に迎合し過ぎた様に思われる」とも批判している。⁽⁷⁵⁾

笠置山が指摘したように、確かに和久田や八尾が求めた国技相撲には、大相撲の力士がそれ

その身体の内側から獲得してきた伝統的身振りが必要とされていない。異民族の住む「新興国」満洲で「白紙の状態」から彼らがめざす国技相撲とは、「土俵を剣の峯とし、土俵外を奈落と想定する生か死かの真剣勝負」を追求し、「身命を捧げて君国にご奉公を尽くし得る実行力を養成すること」⁽⁷⁶⁾を使命とする、原理的で先鋭的な国技相撲である。しかしそれはまた、相撲という日本の土着的な「文化的身体」から自らを遠ざけ、神代の時代に源を求める観念的な「国技」への道を歩み出したことを意味していた。

おわりに

大相撲はどの時代においても権力者の庇護を受け、融通無碍に形を変えて生き延びてきた。明治以降一時低調となったものの、日清・日露戦争期の相撲ブームで新たに息を吹き返し、日本人の海外進出の動きに併せて巡業の範囲も内地から外地へと広がりを見せた。1925年の財団法人化によりその社会的地位は安定したが、同時にそれは、国技の体现者という重い役割を引き受ける出発点となった。

とはいえ大相撲はもともと一種の興行団体に過ぎず、財団法人格を付与されたとはいえ、それ自体に「ナショナルな身体の表象」という志向性があったわけではない。なしくずし的に国民から「この国の1つの伝統を代表するという社会的役割を担われた、特別なスペクタクル」⁽⁷⁷⁾と見なされるようになった大相撲は、その前近代性ゆえに、近代教育の一環として学童相撲の普及を推進しようとする教育現場とは齟齬が生じ、一方戦時下においては、その豊かな娯楽性ゆえに日本精神の鼓吹をはかるべき「国技相撲」を模範的に演じることができなかった。

こうした曖昧な立ち位置にいた大相撲がかりうじて存在感を示すことができたのは、戦時期の外地巡業や皇軍慰問などである。ナショナリズムの高まりとともに、双葉山が活躍する大相撲の人気は頂点に達し、外地での活動は自己の役割イメージを確認する絶好の機会となった。内実は主に収益面で重視されたにすぎなかった外地巡業が、「国技の使命」という大義名分で行われたことは、大相撲の国技化を促進させたであろうし、戦後から現在に続く大相撲の安定的な地位確保につながったとも考えられる。

一方、このような興行団体としての大相撲のありかたにアンチテーゼを示す者もいた。八尾秀雄は大相撲と一線を画した立場で、児童向けの教育相撲を考案し、普及に努めた。「春秋園事件」で大相撲改革に挫折した和久田三郎は、新天地満洲で「角道」という新たな相撲道をめざそうとする。台湾・満洲という外地には、植民地育ちの八尾と、大相撲界の異端児和久田が、異民族支配を前提にドラスティックな国技相撲の実現を試みるための舞台が準備されていたのだった。

日本の敗戦と満洲国の崩壊後、外地で生まれた観念的な国技相撲もまた生きる場所を失った。一方大相撲は、1966年に財団法人日本相撲協会と名称を変更したのちも「相撲の指導普及」を主目的として本場所と興行を実施し、日本の大衆的な技芸として国民に愛され続けている。しかし、戦後の日本社会が再び大相撲を国技と認識してきたという事実と経緯をみると、戦前

の外地と内地で日本人がそれぞれ相撲に投影させたナショナルな心性は、大相撲を通じて交錯し、現在もぼんやりとした像を結び続けていると思わざるを得ない。

※本稿で引用した原史料は、読みやすさを考慮して句読点を補い、旧漢字・旧仮名遣いは現在のものにあらためた。

※本稿は拙稿「帝国日本の相撲 外地からみた「国技」と大相撲」『現代思想』第38巻第13号、青土社、2010年11月、184-202頁、を加筆・修正したものである。

※本稿は、日本学術振興会平成22年度科学研究費補助金（基盤研究C：課題番号22520687「帝国日本の「外地」における相撲の受容と大相撲の「国技化」に関する調査研究」）による研究成果の一部である。

【注】

- (1) 加藤隆世『明治時代の大相撲』国民体力協会、1942年、4頁。
- (2) 稲垣正浩・今福龍太・西谷修『近代スポーツのミッションは終わったか 身体・メディア・世界』平凡社、2009年、205頁。
- (3) 新田一郎『相撲の歴史』山川出版社、1994年、赤澤史朗「戦時下の相撲界―笠置山とその時代―」『立命館大学人文科学研究紀要』75号、2000年。筆者は両氏の論考に非常に多くの示唆を受けた。ほかに近代スポーツ史全般の論考として、坂上康博『スポーツと政治』山川出版社、2001年、坂上康博・高岡裕之編著『幻の東京オリンピックとその時代』青弓社、2009年、などがある。
- (4) 『創立十周年記念台湾体育史』台湾体育協会、1933年、459頁。
- (5) 橋本白水『船越倉吉伝』三協社、1931年、17-18頁。
- (6) 蔡秀美「台湾近代消防制度之萌芽―以日治初期台北地区在台日人消防組之試行為中心―」『台湾文獻』58巻2期、2007年、301-305頁。
- (7) 橋本白水前掲書、扉写真。
- (8) 「地方巡業だより」『相撲』創刊号、1936年、116頁。
- (9) 「地方巡業珍談」『野球界』臨時増刊夏場所相撲号、1920年、51-52頁。
- (10) 加藤隆世前掲書、465頁。
- (11) 同上、466-467頁。
- (12) 泉林八「二十二代庄之助一代記」<http://www.bekkoame.ne.jp/~iitomo-i/mokuzi.html>
- (13) 「布哇遠征赤毛布の巻」『野球界』13巻1号、1922年、125頁。
- (14) 「呑気極まる地方巡業」『野球界』13巻1号、1922年、56頁。
- (15) 「喫煙室」『運動と趣味』2巻3号、1917年、47頁。
- (16) 「地方巡業珍談」『野球界』臨時増刊夏場所相撲号、1920年、53頁。
- (17) 前原太郎『呼出し太郎一代記』ベースボールマガジン社、1954年、162-179頁。
- (18) 「華々しい東西合併大相撲」『運動と趣味』3巻3号、1918年、10-11頁。
- (19) 鳴戸政治『大正時代の大相撲』国民体力協会、1940年、452頁。
- (20) 朝日山「大阪力士の米国巡業」『野球界』11巻2号、1921年、70頁。
- (21) 鳴戸政治前掲書、56頁。

- (22) 舟橋聖一『相撲記』講談社、2007年、215頁。
- (23) 横井鶴城「角道改革諸案」『野球界』11巻7号、1921年、2-9頁。
- (24) 赤澤史朗前掲論文、89-90頁。
- (25) 鳴戸政治前掲書、460-464頁。
- (26) 赤澤史朗前掲論文、94頁。
- (27) 八尾秀雄『角道教習指針』満洲帝国武道会、1941年、195頁。
- (28) 北村嘉恵『日本植民地下の台湾先住民教育史』北海道大学出版会、2008年、146-148頁。
- (29) 宋龍生『卑南公学校与卑南族的發展』国史館台湾文献館、2002年、206-207頁。
- (30) 渡邊昌史「臺灣原住民の相撲変容にみるアイデンティティ：知本プユマの言説からのアプローチ」早稲田大学人間科学研究科博士論文、2006年、154頁。
- (31) 八尾秀雄「基本教材としての相撲体操に就て」『台湾教育』416号、1937年、27頁。
- (32) 渡邊昌史前掲論文、147頁。
- (33) 同上。
- (34) 秀雄が1929年（昭和4）に台湾で出版した『体育的相撲舞踊』は、「音楽の作奏によって行われるところの律動的相撲体操」に関する内容で、のちの相撲体操の「前身」をまとめたものだという。（八尾秀雄「基本教材としての相撲体操に就て」『台湾教育』416号、1937年、27頁。）
- (35) 作曲者の岡本新市は花蓮港高等女学校の教員で、「花蓮港高等女学校校歌」「蕃社踊り」「花蓮港音頭」などの作曲も手がけている。八尾も台湾東部での活動を通じて岡本と面識をもった可能性が高い。
- (36) 「讃えよ国技」の歌詞は5番までであるが、ここでは1番だけ紹介しておく。「神代このかた 栄ゆる国技 いざや讃えん 相撲道 エンヤサノコラシヨ ドッコイショノヨンヤサ 鍛えよからだ 磨けよ心」（八尾秀雄『小学生相撲読本』田中宋栄堂、1938年、3-4頁。）
 なお、石川県鳳珠郡の能登町立小木小学校では、現在でもこの曲と歌詞にのせて児童が相撲体操を行っている。平田文博校長によると、昭和30年代から近隣地域の各小学校で実施されていたようだが、次第に減少し、現在は小木小学校1校のみで、体操の動作は八尾のものとは異なるという。平田校長には貴重なお話をうかがった。あらためて感謝の意を表したい。
- (37) 八尾秀雄「新体操要目の相撲に就て」『台湾教育』413号、1936年、17頁。
- (38) 八尾秀雄・土屋七平・中野誠一「貝林郡教育総会に於ける相撲研究発表概要」『台湾教育』419号、1937年、104頁。
- (39) 八尾秀雄「新体操要目の相撲に就て」『台湾教育』413号、1936年、20頁。
- (40) 八尾秀雄『学童相撲指導法』（改訂版）精文堂、1934年、14頁。
- (41) 八尾秀雄・土屋七平・中野誠一前掲論文、102-107頁。
- (42) 八尾秀雄『小学校・中等学校・青年学校 相撲教範』（増訂版）相撲教育会、1940年、12頁。
- (43) こうした八尾の指導法が当時の台湾の教育現場でどの程度普及したのかは、現時点で明らかではない。ただ、限られた史料のなかに、幼少時に八尾の指導を受け、のちに台湾中部の埔里南公学校教諭となった大島喜代志の記述がある。彼は担当学級の児童を対象として「素直な純一な日本人をつくる」ために八尾の教育相撲に沿った相撲指導を実施した。その結果「二、三時間の作業にへたばるものもなくなり、本島人の体格の欠点たる胸囲も大きくなった」、「相撲によって日本人としての気魄を体得したのか、はきはきとして来た」という手応えを得たと述べている。（大島喜代志「相撲と中学年訓育」『台中州教育』7巻2号、1939年、13-18頁。）
- (44) 八尾秀雄「基本教材としての相撲体操に就て」『台湾教育』416号、1937年、26頁。
- (45) 日本統治期台湾における相撲の受容に関しては、稿を改めて論じる予定である。
- (46) 1939年（昭和14）、矢尾鴻と名乗る人物が大阪の裕文堂書店から『少年相撲の手ほどき』という小冊子を出版している。本書によると、これは大毎小学生新聞（現・毎日小学生新聞）に大阪市の「本田小学校体操主任」の矢尾が連載した「相撲手ほどき」をまとめたものであるという（1-2頁）。内容は相撲の知識や試合・稽古の方法を子ども向けに平易に解説したもので、さらに「八尾秀雄先生

という先生も相撲を色々と研究され、皆さんに適した相撲体操を奨めて居られます」と前置きしたうえで、大阪毎日新聞主催の「学童集団体育大会」で行われたという八尾式の「相撲体操」を紹介している（79-80頁）。活動時期や活動地域からみて、この小冊子の筆者矢尾鴻は八尾秀雄と同一人物であろう。また、翌1940年（昭和15）の大阪市厚生協会主催「紀元二千六百年奉祝興亜厚生大会」の「厚生運動大会」では、大阪市本田小学校および精華小学校児童による「相撲体操」が披露されたが、これも八尾式の相撲体操である可能性が高い。（佐々木浩雄「量産される集団体操—国民精神総動員と集団体操の国家的イベント化—」坂上康博・高岡裕之編著前掲書、430-431頁。）

- (47) 八尾の著書『小学生相撲読本』（田中宋栄堂、1938年）には、大阪市大宝小学校・大阪市精華小学校（ともに現在の大阪市立南小学校）の校長および訓導教員への謝辞が述べられており、両校での八尾の相撲指導や講話の写真が掲載されている。このことから、両校が上述の本田小学校とともに八尾の大阪の教育現場における活動拠点であったと推測される。
- (48) 佐渡ヶ嶽高一郎「学童相撲手引（一）」『相撲』創刊号、1936年、141頁。
- (49) 「相撲と鍛錬」『野球界』31巻22号、1941年、128頁。
- (50) 八尾秀雄『小学校体育 相撲体操と競技法』厚生閣、1935年、125頁。
- (51) 「相撲基本体操」『相撲』3巻9号、1938年、2-3頁。
- (52) 菅原彌吉「関西学童相撲所感」『相撲』3巻9号、1938年、42-43頁。
- (53) 藤島秀光「相撲道に對立なし」『相撲』4巻8号、1939年、3頁。
- (54) 藤生安太郎「相撲道の復活と国策」大日本清風会、1938年、282頁。
- (55) 彦山光三『相撲道綜鑑』国民体力協会、1940年、21頁。
- (56) 赤澤史朗前掲論文、128頁。
- (57) 「地方巡業だより」『相撲』1巻9号、1936年、8-23頁。
- (58) 渡邊公平「兵隊と相撲」『相撲と野球』33巻14号、1943年、41頁。
- (59) 赤澤史朗前掲論文、119頁。
- (60) 和久田の建国大学における活動については、志々田文明『武道の教育力 満洲国・建国大学における武道教育』日本図書センター、2005年、を参照。
- (61) 和久田三郎『相撲風雲録』池田書店、1955年、248頁。
- (62) 和久田三郎・八尾秀雄『角道教習指針』満洲帝国武道会、1941年、14頁。
- (63) 和久田三郎前掲書、237頁。
- (64) 同上、238頁。
- (65) 「昭和十五年満洲場所記録」『相撲』5巻9号、1940年、4-19頁。
- (66) 「大相撲界の近状」『相撲』5巻8号、1940年、2-3頁。
- (67) 和久田三郎前掲書、240頁。
- (68) 「編集後記」『相撲と野球』33巻21号、1943年、116頁。
- (69) 1941年（昭和16）の3月上旬から4月下旬にかけて、笠置山、盤石両大関を中心とした「南支慰問力士団」が中国・広東方面の皇軍慰問を実施した。慰問相撲は外地興行とは異なり、「戦線到る処に設けられてある土俵にのぞんで、兵隊サンを相手に稽古をつける」のが主な内容だった。「兵隊サンは夫れを非常に喜ぶのであって、（中略）それがあの人達に取っての何よりの楽しみ」だったというが、「一日にニカ所は駆け廻る」強行軍は力士たちに大きな負担となった。夏場所直前のこの時期に長い船旅と過酷な行程を強いられた力士たちは、「大抵の者は二三貫匁位は体重を減らしていた」という憔悴ぶりで帰国、夏場所の成績も芳しくなかったという。（大久保澄夫「南支慰問力士団の苦闘」『野球界』31巻14号、1941年、61-63頁。）
- (70) 和久田三郎前掲書、249頁。
- (71) 八尾秀雄『国民相撲教育』国防武道協会、1943年、1頁。
- (72) 同上、222頁。
- (73) 同上、2頁。
- (74) 赤澤史朗前掲論文、119頁。

- (75) 笠置山勝一「満洲の角道」『相撲と野球』33巻7号、1943年、54頁。
- (76) 和久田三郎・八尾秀雄前掲書、18-19頁。
- (77) 稲垣正浩・今福龍太・西谷修前掲書。